

「鉄と鋼」と私

現場の技術者と「鉄と鋼」

The Heart of Engineers Beating in Situ – Tetsu-to-Hagané

友野 宏

Hiroshi Tomono

新日鐵住金(株)

代表取締役社長兼 COO

私が「鉄と鋼」を読み始めたのは1968年、大学の4年生となり研究室に配属された時である。それ以来45年間、ある時は何回も何回も熟読し、ある時は目を通し、又ある時は斜め読みし、読み続けてきたということになる。

読み始めたきっかけは先輩のアドバイスで「講演大会での発表や、学会誌への投稿には鉄鋼協会の会員にならなければいけない」という事であった。会員になると、鉄と鋼、年2回の講演大会の予稿集が送られてくるようになったのがそもそのスタートであった。

45年間も読み続けている訳だが、「鉄と鋼」にまつわる最も強烈な思い出は、実はさらに10年程さかのぼる事になる。大学院生になった頃に「鉄と鋼」の論文を読んでいて気になる引用文献に行き当たった。早速学科の図書室に行って「鉄と鋼」(多分1960年前後の頃のものだと思うが)を書棚から取り出して読書机の上で当該のオリジナルの論文のページを開いたときにソレがあったのである。ソレとはグラフを鉛筆で丁寧に写しとったトレーシングペーパーであった。その論文の肝と思われるグラフを誰か当時の先輩が恐らくは直線定規、曇形定規とテンプレートを使って、大変な時間をかけて写しとったものと思われる。簡単に文献をコピー出来るゼロックスマシーンなどが無い時代、どうしても欲しいグラフを手で写しとったのである。論文を徹底的に読み込む、そしてどうしても欲しい、気になるグラフは手で写しとる。ここまでこだわった先輩の執念というか気迫に触れてハッとしたのである。実に強烈な思い出である。とり合えずマシンでコピーして積んで置いてそのうち読んだらいいやという昨今とは「鉄と鋼」というか、学術論文に対する思い入れの深さにおいては大違いであったと思われる。ところでグラフが入念に写しとられたそのトレーシングペーパーが何故そこに残っていたのか? 謎である。一生懸命手間暇かけて写しとってそのまま忘れてしまったというのはまず考え難い。では何故? 私の仮説は以下の通りである。トレーシングペーパーに写し

とられたグラフは当時コピーの標準的な手だてであった青焼きコピーの原紙としてゼミの輪読メンバーに配られた。そしてその役割は終えたのだが、あれだけ手間暇かけて写しとったのだから捨てるのはあまりにも勿体無い。さらにこの図はこの論文の肝である。従って後輩の誰かにこのグラフの重要性を伝え、なおかつ後輩がこれを使ってブループリントを作れるようにとのメッセージと思いやりなのではなかろうか…。

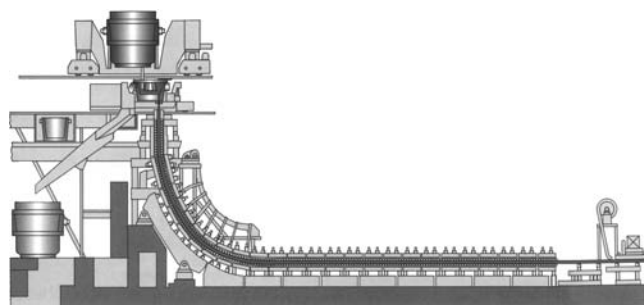
さて、「鉄と鋼」、今では世界の鉄鋼技術に関する最も重要で信頼されるクォリティーペーパーである。英文誌であるISI Internationalとも合わせて世界中の鉄鋼技術に携わる読者達が眼光紙背に徹する思いで読んでいるのである。従って最も大切にすべき事は論文の質の維持と向上であろう。そのためのキイは“しっかりと査読をすること”であろう。多忙な毎日の中で査読をし、指導をし、掲載論文の質を上げるという作業は査読者にとっては大変な負荷である。しかしここで手を抜けば「鉄と鋼」の権威は地におち、いずれ世界中の読み手から見放されて行くであろう。鉄鋼協会には査読者の負担を減らし、且つまた負担に報いる手立ての強化を期待したい。

永年にわたって製鉄業の現場の第一線で働いてきたエンジニアにとって、「鉄と鋼」本編と同様に、あるいはそれ以上になじみの深いのが、春・秋年2回の講演大会の予稿集である。練りに練られ、きちんと査読された学術論文としての価値の確立された「鉄と鋼」に対して、講演大会の予稿集は、云わばその時々々の旬の操業技術なり、アカデミアの成果なりが半年に1回という速報性をもって集成されているということに大いなる価値と意味合いがあるのである。予稿集の1ページに盛り込まれた旬の情報と、それを受けての講演大会でのディスカッションがお互いの刺激材料として、日本の鉄鋼に携わる者全員がアカデミア、実業部門を問わず激しい競争を繰り広げ、もって日本鉄鋼業の技術レベルを急速に押し

上げてきた訳で、その役割の重要性は高く評価されるべきである。私自身も24時間連続操業の製鋼工場で働きながら実操業で起きている事を経験則の積み上げにとどまらず、なんとか理論的裏付けと体系化をしたいものと日夜努力していたのであるが、その過程で自分の立ち位置と努力の方向性の確認の最高の手だてが、予稿集に最新の知見をまとめる事と、講演大会で多くの人達と議論の場を持って刺激を受ける事であった。前述のトレーシングペーパーではないが、私のキャリアの初期の頃は予稿集に投稿する図や表は直線定規や曇型定規とテンプレートで自ら墨入れをして作成したものである。研究所や学校に居る人達とは違って、操業現場第一線に居ながらの身にとっては完全にエクストラの仕事で時間的には結構キツイものであったが、その苦労を吹き飛ばす程の刺激の場が用意されていた訳で、今さかのぼって思い出しても大層熱気にあふれ充実した時と場を鉄鋼協会に与えてもらったのだと感謝している。この様な良き場を与えてもらっ

ている中で自分として心掛けていた事がある。それは受益するばかりでなく、それ相応の貢献をすべきであるという事である。その目安としていたのが「鉄と鋼」、予稿集、講演大会での発表等々、鉄鋼協会の活動において、会社の粗鋼シェア分の貢献がミニマムであるという事であった。例えば自分が関わっている分野での年間の論文数なり発表件数の合計に粗鋼シェアを掛けた分；総計50件で粗鋼シェアが20%なら10件；は少なくとも貢献しようという考え方である。論文の投稿もしない、講演大会でも発表しない、しかし出席はして熱心に質問だけする。即ち貢献はしないが成果の恩恵は受ける、これはフェアでないという事である。鉄鋼業に身を置く者は主体的に参画をして、鉄鋼業のレベルアップに全員で取組むのだという、日本の鉄鋼人の美風をぜひ盛り立てていきたいものである。

(2013年8月29日受付)



「鉄と鋼」の 今昔

■「鉄と鋼」40周年記念号掲載の依國一氏の「日本鉄鋼協会創立当時の回顧」より抜粋

以下は、「鉄と鋼」に本会創立40周年記念号のために創立当時の事情を依國一先生が「83老叟」と称して執筆されている記事から抜粋したものである。100年前を40年経って振り返り、将来の発展に寄せる思いが非常に興味深い。

「(前略) 自分は最初から会誌「鉄と鋼」の編集を受持ったもので、自ら校正もしたし、また原稿の集め方に苦心し鉄道研究所や通信省船舶局の友人に懇請したこともある。野呂先生の創刊号より連続17回に亘る長編「本邦製鉄事業の過去および将来」と題する論文を寄せられるのをありがたく思った。会誌の表紙にある「鉄と鋼」の文字はたしか香村小録博士が某書家に頼まれたものと記憶する。会誌の体裁は当時の一般の例に準じて縦書であったが、大正14年すなわち第11年より現在の横書

となった。その時分に種々編集事務など助けて下されたのは海軍技研の室井嘉治馬氏、陸軍の川上義弘博士ならびに大学の井上克巳博士等である。(略) 依博士記念資金取扱規則なるものがある。昭和7年東京大学退職に際し知人の方々が募集して下さった一部の金員を本会に差し出し、優秀な論文に対する奨励に使われる。誠にありがたい痛み入ることである。(略) 顧みて各先輩の努力せられた跡が身にしみ俥ばれ懐しい。それに引き続き各後継者の努力と各製鉄会社の絶大な援護および通商産業省と鉄鋼連盟との協力を得て協会が今後益々隆盛となるを祝し得る仕合を喜び、併せて将来の発展活動を冀う気持で一杯である。」

(「鉄と鋼」Vol.41 (1955), No.7, p.680-682)